

介護の日本語教材の研究ービデオ教材開発に向けてー

英保 すずな

渡嘉敷 恭子

要旨

日本で介護関係の職業に就くことを目指している外国人が介護現場で用いられる日本語語彙・表現を、動画を見ながら自分のペースで自律的に学習でき、また、彼らが学ぶクラスでも使用できるビデオ教材を開発することを目標としている。まずその第一段階として、シラバス作成の際に参考とする既存の介護の日本語教材の中から比較的新しいものを選択し、内容を調査した。

【キーワード】介護、日本語教材、教材分析

1. はじめに

少子化、高齢化が進む日本においては今後、介護人材が不足するであろうことが懸念されている。そのために政府は EPA（経済連携協定）⁽¹⁾などにより外国人人材の受け入れと育成を進めている。また、外国人労働者の受け入れを拡大するための入国管理法改正案が成立し、政府は介護や建設など 14 業種で受け入れを検討している。これまでも政府の助成金のもと、介護現場では専門分野の学習に加えて日本語学習や生活支援を行ってきたが、2015 年に早稲田大学大学院教授、宮崎里司氏も「視点・論点 外国人の日本語教育を考える」（NHK 解説アーカイブス）で日本語教育の専門家による日本語学習の機会がある人は非常に少ないのが現状であると述べている。そうした要因もあいまって介護福祉士の国家試験の外国人合格率は低く、5 割強にとどまると言われる。福祉現場においては介護士が被介護者とインタラクションを行う際の意思疎通は絶対不可欠なものであり、近年、現場で必要とされるこのようなコミュニケーション能力を育成するための学習支援プログラムの拡充や教材開発が急速に進められている。そうした中で、例えば入浴・食事介助とい

った具体的な場面でどのように声掛けをして被介護者とどう接するか、文化的側面の理解も含めて学習者が自律的に言語学習をすすめていけるようなビデオ教材を開発したいと考えた。そのためにまず、ビデオ教材のシラバスを選定するにあたり、既存の外国人介護福祉士養成用のテキストの中から比較的新しいものを選び出し、それらを①会話を学ぶための教材；②漢字・語彙を学ぶための教材；③「介護の日本語」の教授法を学ぶための教材；に分けて、内容や特徴について分析を行った。

2. 会話を学ぶ教材

2.1 「場面から学ぶ介護の日本語」2010 凡人社

2.1.1 対象学習者とレベル

介護の現場で就労中の日本語学習者、あるいは介護現場での就労を志す日本語学習者。『新日本語の基礎Ⅰ』『同Ⅱ』『新日本語の中級』（スリーエーネットワーク）修了程度のレベル。

2.1.2 媒介語

本冊は日本語表記のみ。凡人社のサイトから英語、インドネシア語、スペイン語、ポルトガル語の「翻訳ノート」、インドネシア語の「ことばノート」、「漢字練習帳」が無料でダウンロード可能になっている。英語とインドネシア語の「翻訳ノート」には単語のリストと会話部分の翻訳がついているが、スペイン語版とポルトガル語版には会話の翻訳はついていない。「ことばノート」は本冊で新出語として学習した 650 語を五十音順に並べたリストである。「漢字練習帳」は本冊で出てくる漢字からよく使われる漢字 200 字を学習できるようになっている。

2.1.3 構成

本冊は全 20 課で、各課は「起床」、「朝の体温測定」など場面で分けられており、それぞれの課は「学習の前に」「～に関する言葉」「会話」「会話の練習」ロールプレイ「会話をまとめる」「表現の練習」「書く練習」で構成されている。付属のCDには会話などの音声収録されている。

2.1.4 特徴

本冊と出版社のサイトからダウンロード可能な教材で構成されている。補助教材が豊富で、介護の現場での会話を覚えるだけでなく、語彙を増やしたり、漢字を学習したりと学習者にとって選択肢の多い教材となっている。また、本冊さえ購入すれば、他の教材は無料で手にいれることができるので、学習者の経済的な負担を軽減した良心的な教材だと言える。著者らが開発を目指すビデオ教材も補助教材を多く提供したいと考えているので、大いに参考になる教材だと言える。また、場面別に構成されている点もシラバス決定の際には参考にしたい。これらの理由から完成度の高い教材だと言えるが、会話部分にイラストがついているだけなので、全体的に視覚的な情報が少ない。非言語活動についての情報も含むビデオ教材の必要性を感じた。

2.2 「介護スタッフのための声かけ表現集」2009 凡人社

2.2.1 対象学習者とレベル

すでに日本で介護関係の職業に就いている人、及び将来介護サービス関係の仕事に従事することを目標にしている人。初級レベルの日本語を修了している人（約 300 時間の日本語学習を終えている人）。

2.2.2 媒介語

英語のみ。すべての日本語に英語の訳がついている。

2.2.3 構成

本編の前に「基本の声かけ」として挨拶や確認などの基本的な声かけを紹介した後、介助の基本である五大介助、「移動の介助」、「食事の介助」、「排泄の介助」、「衣類着脱の介助」、「身体清潔の介助」の五つのパートで構成されている。例えば「食事の介助」の章であれば、「食事の姿勢を確認する」、「配膳し、献立を説明する」などの下位機能で分類し、声かけ表現を詳しく紹介している。CDが付属されていて、声かけの表現の音声収録されている。

2.2.4 特徴

声かけ表現を機能面から整理してあり、学習者にとってわかりやすい構成になっている。また、声かけをする際のポイントなど詳しい情報を提供している。また、

言語についての情報だけでなく、介護の手順、例えば「移動の介助」の中の「体位変換が終わる」では「仰臥位から側臥位に体位変換するときの留意点」として「顔を体位変換する方向に向けてもらう」「腕を組む」「両膝を立てる」など技能的な留意点にも言及している。著者等が開発を目指すビデオ教材でもこのような技能的な知識を動画で提供したいと考えているので、非常に参考になる教材だと言えよう。

2.3 「介護の日本語」2005 日本フィリピンボランティア協会

2.3.1 対象学習者とレベル

介護現場での就労を志す、初級レベルを修了した日本語学習者、基本的な日本語 4 技能（読む・書く・聞く・話す）を習得した学習者。

2.3.2 媒介語

英語のみ。すべての日本語に英語の訳がついている。

2.3.3 構成

場面シラバスに基づく。各課は、①起床、②食事介助、③体位交換、④排せつ、⑤衣類着脱、⑥入浴・清拭、⑦生活環境整備、⑧（病気・怪我などの）応急処置の場面ごとに構成されている。流れとしてはまずその課の目的や学習項目を英語で示し、次に各場面における会話例をその対訳とともに紹介する。続いて各課のメイン表現を練習したのち、被介護者との円滑なコミュニケーションを促進するための表現を、例えば「具合を聞く」「行動を促す」などの言語の機能面に着目して紹介する。最後に仕上げとして、現場で遭遇するであろう状況のもとで与えられたタスクを、学習した文型・表現を用いてどう達成するかという練習を行う。新出語彙は各課の最後にリストアップされている。

2.3.4 特徴

このテキストはフィリピン人介護スタッフが日本の特別養護老人ホームで体験学習を行い、その実践をもとに自分たちが必要とする介護の日本語としてまとめ、日本語教育の専門家の監修のもとでミンダナオ国際大学の教材として作成されたものである。介護士として日本で働きたいという人たちは増えているが、それまで日本の介

護現場の詳細の情報は入手しにくかった。そんな中、日本の介護の現場で実際に働いたフィリピン人介護士による情報にもとづいて作られたこのテキストは画期的なものだと序文に記されている。介護現場のスタッフと日本語教育の専門家とが共同で開発した教材だけあって、各課が教材として「教える側」に使いやすいように体系的に明快にまとめられている。さらに、「学ぶ側」にとっても実践的な内容となっている。例えば、①「わからないことをほかのスタッフに聞く」という項目を第一課に配し、現場での自律的学習を促す工夫がなされている点、また、②介護現場における様々な問題に直面した時の解決法をロールプレイやディスカッションを通して協同的に学べるなど現場のニーズに即した学習内容が豊富に盛り込まれている点、である。総合的、介護スタッフとしてのコミュニケーション能力の向上が図れるという見地から高く評価できるテキストであると考ええる。

2.4 「外国人のための会話で学ぼう！介護の日本語―指示が分かる、報告ができる―」2017 中央法規出版

2.4.1 対象学習者とレベル

介護現場に就労する外国人で、初級日本語修了者。

2.4.2 媒介語

英語・インドネシア語・ベトナム語・ミャンマー語

2.4.3 構成

本冊と別冊からなる。本冊は第1部が全16章からなる介護現場の場面、第2部は職員の指示を聴いて理解する練習、第3部は行った介護行為を報告する練習という構成になっている。各章は①会話の漫画、②会話のスクリプト、③会話で使われている文型・例文・練習問題、④会話で使われている語彙、⑤例文・練習問題で使われている語彙、⑥その他の関連語彙からなっている。別冊は本冊の翻訳で、①は各章の会話文・文型・例文の翻訳、②は語彙リスト（翻訳付、約1500語）から構成される。音声教材については第1部各章の会話文、文型・例文・ことば、第2部の指示と問題の音声は中央法規出版のWebサイトで提供されており、無料でダウンロードできる。

2.4.4 特徴

各章の最初にその章の会話場面がイメージしやすいようにコマ割り吹き出し付きの漫画で提示されている点が画期的である。特に日本語介護現場における介護士と被介護者との言語的・非言語的コミュニケーションの様子がイメージでとらえられることは、異なる文化的言語的背景を持つ学習者にとって学習上の大きな助けとなると思われる。さらに本書のタイトルにある「職員の指示が理解できる」そして「自分の介護行為が報告できる」という学習目標が全章にわたり首尾一貫して与えられている点でも自らの学習の方向付けがしやすくなると考えられる。介護現場に就労する外国人にとってスタッフと密に連携し、情報のやり取りを正確に行うことが一番重要であるとの考え方から、学習方法としては、まず①テキストに沿ってコミュニケーションが行われる場面を漫画からイメージし、②そこで使われている文型や関連語彙などを学習する。その後、③音声教材を使うなどして会話文に含まれる指示と報告の部分を取り出して学習し、④最終的に「スタッフの指示が理解できる」、「スタッフに報告が行える」を目標に学習を進めていくという方法が推奨されている。被介護者のための安心・快適なケアを行うために必要不可欠なコミュニケーション能力の習得に焦点をあてたこの教材はきわめて実践的なものであり、将来的にも現場での総合的な自己学習力につながっていくものと考えられる。ただし、介護職における連携業務は口頭だけではなく、書面での記録作成や閲覧といった読み書きの技能も必須であるため、このテキストを主教材として使用するならば、それに並行して介護場面で実際に行われている書面でのやり取りのし方を習得するためのトレーニングが別途必要であろう。

3. 漢字・語彙を学ぶ教材

3.1 「はじめて学ぶ介護の日本語 基本のことば」2017 スリーエーネットワーク

3.1.1 対象学習者とレベル

日本で介護関係の職業に就くことを目指している人、福祉系の大学や専門学校、日本語学校等で学んでいる人、すでに介護の仕事に就いている人。初級レベルの日本語を修了した人。

3.1.2 媒介語

3.1.3 構成

「施設のことば」、「体・体調のことば」、「介護のことば」、「制度のことば」、「まとめの問題」の五つのパートで構成されている。

3.1.4 特徴

本冊と別冊で構成されている。1500語を収録し、「施設のことば」、「体・体調のことば」、「介護のことば」、「制度のことば」の4パートに分けられ、最後にまとめの問題がついている。各パートの最後には学習した単語を読む練習問題や学習したことばと一緒に使う言葉を書かせる空所補充式の練習問題がある。Part2の体のことばでは図などで体の部分や内臓の名称などを学習するようになっている。

この教材の「テキストの特長と使い方」の中で介護の基本のことばについて「読みと意味を知る」「ことばと例文から介護全体のイメージを形づくる」、「介護の場面で使用が意識できる」を目指して作成されたと書かれている。従って著者らが開発しようとしている介護の現場で使われる表現を学習するビデオ教材の補助教材のひとつである単語リスト作成時に参考にできるだろう。

3.2 「やさしく言いかえよう 介護のことば」2015 三省堂

3.2.1 対象学習者とレベル

介護現場での外国人就労者、あるいは就労希望者、国家試験合格をめざす外国人介護福祉士候補者

3.2.2 媒介語

なし

3.2.3 構成

医療専門用語、介護用語・医療看護用語、外来語の3章からなる。各章の下位分類として例えば介護用語では「食事」「排せつ」「入浴」「分泌物」など、医療看護用語では「体の部分（の名称）」「いろいろな症状」「分泌物」など、外来語では「介護・

福祉の概念」「介護用具・補助具」などに分け、外国人介護士にとってなじみのない専門用語約 130 語をわかりやすいことばで言い換えている。続く [解説]ではどういう点がわかりにくいのか、どうすればわかりやすくなるか、ほかの似ている語と比較するとどうなるか、などを解説している。[例]ではわかりにくいことばを使った文例と、わかりやすいことばで言い換えた文例と並置・比較している。

3.2.4 特徴

日本での介護福祉士としての就労を目指して来日したものの通常 3 年の研修期間を経たのち受験する国家試験に合格できず帰国を余儀なくされる人たちは相当数にのぼる。研修中の介護の現場やテキストで用いられる語彙の難しさがそれに大きく起因すると言われる。これが、ひいては国家試験での合格を阻む壁となっている。こうした実情を踏まえ介護現場における難解なことばを抽出し、専門外の人でもわかることばで言い換えがなされている。使用頻度が高いことばを選んで掲載しているので、現場でわからない言葉に遭遇した時に意味を確認するために利用できるという点で便利である。巻末の索引に漢字の読みがひらがなで与えられているとより使いやすくなるであろう。

4.1.1 対象学習者とレベル

このテキストは「ワセダバンドスケール（介護版）」⁽²⁾を用いて現場の教育担当者が学習者の能力を測定し、そのレベルを基準に教える方法を指南するもので、対象が学習者ではなく、教育者となっている。従って、対象学習者は特に定められていないが、学習者が独習で使うには難しい構成になっている。介護の現場の教育担当者が中級以上の学習者（介護従事者）を教える際に使う参考書と捉える。

4.1.2 媒介語

なし

4.1.3 構成

第 1 章は外国人介護職の現状についてのまとめ、第 2 章は介護現場での教え方、第 3 章は「ワセダバンドスケール（介護版）」の詳しい説明という構成になっている。

第4章では第3章で測定されたレベルに沿って、「語彙」「文章」「会話」と分けられ、それぞれ簡単な物から難しい物へと段階的にステップアップできるようになっている。

4.1.4 特徴

まずレベル分けをして、その後に指導するやりかたは画期的だと言えるが、第4章の学習内容が十分とは言えず、テキストとして使用するには物足りなさを感じる。先にも述べたが、この教材は介護福祉候補者の教育担当者向けに開発されたものであり。そのため、主教材としてではなく、あくまでも教師用指導書として使用すれば、教育担当者にとって学習指導法のアイディアを提供してくれる貴重な教材だと評価できる。

5. まとめ

以上のように、筆者らは日本語教育に携わってきた経験を活かして介護の日本語に特化したビデオ教材を開発したいと考え、その前段階として現在市販されている教材の分析を行った。その結果、「かつて介護の日本語といえば現場から乖離した、国家試験対策に偏った理論的なものが多く、現場での日本語コミュニケーションを介護者・被介護者の相互的視点からとらえ、何が課題であるかを調査したものは少ない」（大関ほか 2015）と言われていたが、近年は現場の日本語使用の実態調査が進み、ここ数年で現場のニーズに沿った実践的な内容の教材が主流になりつつあることがわかった。介護現場の様々な場面で必要とされる声掛け表現が介助の手順に合わせて示されている教材や、スタッフの指示を聞き取る、被介護者の具合を報告する、行った介護の内容を口頭、あるいは書式で報告するなど、現場ですぐに役立つ日本語が効率的に学習できる教材が開発されており、映像教材開発のリソースとして参考にしたいと思われるものが数多くみられた。また、介護分野の日本語を教える教師のニーズの高まりが予測される中、介護の日本語という不慣れな分野で教育を担当する日本語教師にとっては、指導法についての手引書となりうる「外国人介護職への日本語教育法」のような教材は大いに自己研鑽の助けになると思われる。

6. 今後の課題

今後の外国人介護士の拡大は必至であり、それに合わせて法的枠組みが整備されていくのは歓迎すべきことである。前述の通り、学習者のニーズに合わせて教材も近年めざましく開発されつつある。ただ、外国人技能実習制度に介護職種が加えられ、新外国人技能実習法として施行されるまでにタイムラグがあったのは、当該職種が人とかかわる、つまり高いコミュニケーション能力を必要とする職種だからである。コミュニケーション能力とは言語的・非言語的なものを含む。異なる文化背景を持つ介護福祉候補者や介護実習生には、介護を必要とする日本人の利用者にどのような表情で声掛けをすればよいのか、入浴や清拭などの身体接触はどのようにすればよいのかなどについて視覚的情報が必要であろう。筆者の管見の限りにおいては、このような非言語的なコミュニケーションを音声と映像で提供している教材は見当たらなかった。今後はこの分野でのビデオ開発の一環として、介護施設に協力を仰ぎながら、スタッフや外国人介護士にインタビュー調査やアンケート調査を行い、さらに詳細なニーズ調査を進めていきたいと考えている。

注

- (1) 経済連携協定（英：Economic Partnership Agreement[1]、EPA）とは、自由貿易協定（FTA）の柱である関税撤廃や非関税障壁の引き下げなどの通商上の障壁の除去だけでなく、締約国間での経済取引の円滑化、経済制度の調和、および、サービス・投資・電子商取引などのさまざまな経済領域での連携強化・協力の促進などをも含めた条約である。
- (2) 外国人介護職のために開発された日本語能力測定基準で、4 技能を何ができるかによってレベル 1 からレベル 8 までに分けられる。
- (3) 平成 29 年 11 月 1 日の「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律」（平成 28 年法律第 89 号。以下「技能実習法」という）の施行にあわせ、外国人技能実習制度の対象職種に介護職種が追加されたものである。

参考文献

大関由貴・奥村匡子・神吉宇一（2015）「外国人介護人材に関する日本語教育研究の現状と課題－経済連携協定による来日者を対象とした研究を中心に－」『神奈川大学・国際経営フォーラム』第 25 巻, 239-279.

調査資料

『場面から学ぶ介護の日本語』（2010） 凡人社

『介護スタッフのための声かけ表現集』(2009) 凡人社

『介護の日本語』(2005) 日本フィリピンボランティア協会

『外国人のための 会話で学ぼう! 介護の日本語—指示が分かる、報告ができる—』
(2017) 中央法規出版

『はじめて学ぶ介護の日本語 基本のことば』(2017) スリーエーネットワーク

『やさしく言いかえよう介護のことば』(2015) 三省堂

『外国人介護職への日本語教育法 ワセダバンドスケール(介護版)を用いた教え方』(2017) 日経メディカル開発

(s_abo@kansaigaidai.ac.jp)

(ktokashi@kansaigaidai.ac.jp)